

## 長崎県における高校文化活動の展開過程

### —高等学校総合文化祭を事例とした「知識移転」の視座からの分析—

福田 鉄雄(長崎南山学園高等学校)  
前川 卓郎(長崎県立西彼杵高等学校)  
畑中 大路(長崎大学大学院教育学研究科)

#### I はじめに

本稿では、長崎県における高校文化活動の展開について、特に高等学校総合文化祭を事例に分析する。一般に、高校教育における文化活動の重要性は認識されているものの、その実態は十分に把握されていない。例えば全国高等学校総合文化祭(以下、全国高総文際)は、高校文化活動を牽引する組織である全国高等学校文化連盟(以下、全国高文連)や全国高文連の支部にあたる各都道府県高校文化連盟によって「高校生の文化活動を広く支援することにより、高校生の健全な育成に資する」<sup>(1)</sup>ことを目的に開催されるものであるが、その認知度は全国高等学校総合体育大会(いわゆるインターハイ)に比べ低い。また、当該事項を対象とした研究論文・実践論文・報告の蓄積も少ない<sup>(2)</sup>。これは本稿が対象とする長崎県においても同様である。

しかし長崎県では、長崎県高等学校総合文化祭(以下、「県高総文祭」)の開始(2005年～)や「全国高総文祭長崎大会」(2013年)等を契機として高校文化活動の充実が図られており、その認知度は向上しつつある。このような高校文化活動の充実が可能になった過程を記録として残すことは、長崎県における今後の高校文化活動の更なる発展に資すると考える。

また合わせて、本稿では当該プロセスの展開を「知識移転」の視座から分析する。知識移転とは、新たな「知識」を創造・普及・活用するナレッジ・マネジメント(OECD2012)の過程で生じるものであり、「送り手から受け手へあるチャンネルを経由して知識が移転され、受け手の成果に影響を及ぼすとともに、移転された知識が受け手のルーチンに統合されるプロセス」(中西2013:28-29)を指す。この知識移転は、一般経営学で提唱された組織学習/組織間学習と密接にかかわる理論であるが、教員年齢構成の急激な変化等を背景とし、これまで培ってきた「知識」の創造・継承の方策を探る学校組織を対象とした研究においても有益な分析視座である<sup>(3)</sup>。よって知識移転の視座から長崎県における高校文化活動の展開を分析し、その要点を抽出することは、長崎県同様、高校文化活動の発展を志向する他地域へ示唆を与えることになるだろう。

以上の目的のもと、本稿では、長崎県高校文化活動の展開に深く関わり、また、現在もその改革の担い手として活動する当事者(福田・前川)の視点からその過程

を詳述する(Ⅱ節)。そのうえで、当該過程を知識移転の視座から考察し(Ⅲ節)、他地域でも展開可能な知見の産出を試みたい。

なお本稿は、Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ節を畑中が、Ⅱ節を福田・前川が主に執筆し、福田・前川・畑中により全体の内容を検討した。福田・前川の経歴概要は表1の通りである。

表1 経歴の概要(2018年1月現在)

福田氏	前川氏
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 長崎東高校、西陵高校、五島南高校、長崎北高校、佐世保南高校、県教育委員会を経て西彼杵高校校長に着任。昨年度公立学校教員を退職。</li> <li>・ 教職経験35年、国語科。</li> <li>・ 各高校でサッカー部顧問を歴任。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教職経験14年、英語科</li> <li>・ 長崎南高校、五島高校を経て、現在、西彼杵高校教諭。</li> <li>・ 西彼杵高校では生徒会担当として、生徒とともに演劇や軽音楽に取り組んでいる。</li> </ul>

(畑中大路)

## Ⅱ 長崎県における高等学校総合文化祭の具体

### 1. 長崎県高校文化連盟の発足

全国高文連の都道府県支部にあたる各都道府県高校文化連盟は、各学校の文化系部活動を中核として組織された文化専門部等<sup>(4)</sup>を統括し、成果発表等の取り組みを支援している。当該支部は現在、47都道府県すべてに設置されているが、長崎県に長崎県高校文化連盟(以下、県高文連)が設置されたのは「全国で終わりから3番目」(天野2003:56)となる1989年であった。なお県高文連は設置以来、県南地区<sup>(5)</sup>に位置する長崎県立長崎北高等学校にその事務局を置いている。

県高文連設置当時の長崎県は、「体育・スポーツ活動では、長崎県高体連が、九州ブロック、全国へつながる強力な組織力をフルに発揮して大きな実績を上げている。一部の競技種目では、全国制覇を成し遂げる学校も現れてきた。これに対して、文化・芸術活動は低調そのもので、文化祭・文化部発表会も目を覆いたくなるような状況である」(長崎県高文連1999:4)と評されるほど、高校文化活動は著しく停滞していた。こうした状況を改善するべく県高文連は、文化専門部生徒の取り組みを同時に発表し観覧する機会としての「統合大会」の開催(1993年～)や高校教員を対象とした文化活動研修会としての「研究大会」の実施(1995年～)、全国高総文祭へ向けた壮行発表会の開催(1998年～)等を行っている。こうした活動により一部の関係者に「高体連と高文連は車の両輪である」(長崎県高文連1991:1)という認識が生まれ始めたが、当時は多くの課題も抱えていた。

この課題が顕著に現れていたのが、前述した「統合大会」であった。それまでの長崎県では、音楽部(コーラス、吹奏楽)や美術部等の文化専門部自体がそれぞれ独自で大会を開く状況にあったが、「統合大会」の開催により、高校文化活動に励む高校生たちの一部が一堂に会する場が生まれた。しかし、各文化専門部は

従来から行われる独自大会を重視する傾向にあり、また、当時の県高文連にはわずか九つの文化専門部<sup>(6)</sup>しか組織されておらず、「統合大会」は「入場者数が少し寂しかった」(長崎県高文連 1994: 4)と述

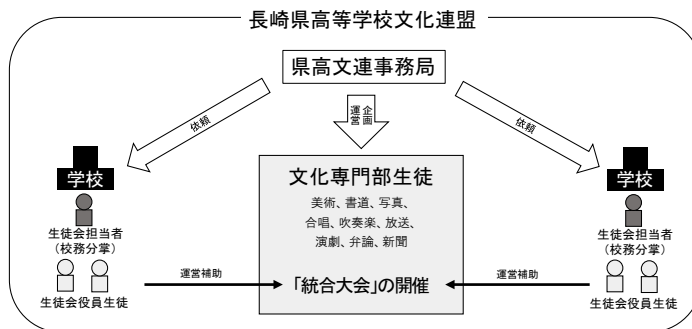


図1 「統合大会」運営形態

べられるような状況にあった。さらに、「統合大会」は県高文連事務局の負担等を背景として<sup>(7)</sup>、「高校生活3年間で1度は参加する機会、観る機会があるように」(長崎県高文連 1996: 3)という理由を付け、2002年度の「第4回統合大会」まで各地区(県北・県央・県南)持ち回りの3年スパンでの開催とされていた。そのため、同じ地区に戻ってくるのは9年後で、次の大会の時には前回大会のことを、教員はもはや誰も知らないという状況に陥っていた。よって県高文連や「統合大会」の認知度は上がらず、「統合大会」の企画・運営は県高文連事務局が担い、開催地となった各地区の学校担当者(多くは生徒会担当者)は、開催年度に突然依頼を受け運営補助を任わされ、そして「統合大会」当日に各文化専門部の生徒を集めるだけの、文化部の総合体として組織されていない、単なる文化部発表会とならざるを得なかった(図1)。

## 2. 県高文連の改革

### (1) 「県高総文祭」の開催

上述した課題を抱えた運営が続く2002年度、私(福田)は県高文連事務局のある長崎北高校へ赴任した。私は前任校の五島南高校で「生徒主体の文化祭」をコーディネートし、「文化の力による学校改革」を経験していた(畑中 2015b)。高校教育における文化活動の重要性を認識していた私は、長崎北高校赴任とともに高文連事務局員となり様々な改革に取り組み始めたのである。

私がまず取り組んだのは、「統合大会」の改革であった。私はそれまでの教職経験から、「文化祭・文化活動の充実が学校教育を豊かにする」という信念を持っていた。しかし、高校文化活動が低調な長崎県では、各校の文化祭レベルも低く、その改善が急務であった。

改革の方向性を模索していたちょうどその頃、私は長野県立高校教諭であるY氏と再会する<sup>(8)</sup>。放送部活動と生徒会活動に多くの実績を持つY氏は、当時、研究プロジェクトの一貫で長崎県放送専門部に関する調査を行っており<sup>(9)</sup>、県高文連事務局のある長崎北高校を訪れたのであった。

長野県では従来、長野高教組を母体とした高校文化活動の取り組みが発展しており、教員と生徒が「同じ土壌に立つ」<sup>(10)</sup>風土が培われていた。それゆえ、各校

で行われる文化祭は生徒が主体的に企画・運営する形態が一般的であり、各学校の文化祭がとても豊かに実施されているという。私はY氏を通じて長野県における高校文化活動の取り組みを知り、私自身がこれまでの教職経験で実感した「文化祭・文化活動の充実が学校教育を豊かにする」という信念の確証を得るとともに、「生徒主体の高校文化活動」の重要性を再認する。私がまだイメージを抱くだけで具体的な改革の方策を見出せていない中、Y氏はその具体を提示してくれたのである。今思うと、彼が改革の出発点であった。

上述のように、私が持つ信念と、Y氏によってもたらされた「生徒が主体的に企画・運営する文化祭実施」という情報が融合した。そして、私が思い描く「イメージ」が形として示されたのが、「第1回県高総文祭」であった。「県高総文祭」は、「従来3年に1度、県南、県北、県央の3地区を巡回していた「統合大会」を発展的に解消し、毎年開催」（長崎県高文連 2006：13）するものとなり、「第1回県高総文祭」では18の文化専門部による活動成果が披露されるとともに、この企画・運営においては「開催（県南）地区の各学校の生徒会執行部代表（役員）を一堂に集め、生徒実行委員会を組織し、企画から運営までを生徒主体で行う」（永田 2014:15）という形が取られた（図2）。私はこの運営形態を通じ、「県高総文祭」に関わった教師や生徒一人ひとりが感動やノウハウを獲得して自校へ持ち帰り、各学校の文化祭や文化部活動のレベルが向上することを期待（意図）したのである。

2005年度に初めて開催された「第1回県高総文祭」は、「高校文化部にとって、最初で最大の催し」（長崎新聞 2005年10月31日7面）、「期待以上の素晴らしい内容」（長崎新聞 2005年11月7日7面）と報じられた。また、観覧に来ていた九州各県の高文連理事長たちは、この生徒主体による総文祭の企画・運営を絶賛し、異口同音に全国高総文祭並の感動があったと評したのである。そして何より、その「第1回県高総文祭」には、県下すべての高校の生徒会代表生徒、文化部代表生徒を観覧者として招いていた。生徒が主体となって創り上げた総文祭の感動は、多くの学校に持ち帰られ、

その後幾つかの学校から、「県高総文祭を真似て、自分たちの学校の文化祭も変わってきました。」という報告があがった。私の期待（意図）は、徐々にではあるが的を射たのである。各文化部の発表は衆目を浴びることとなり、文化部の認知度、そして県高文連の認知度は一気に高まったと言えよう。

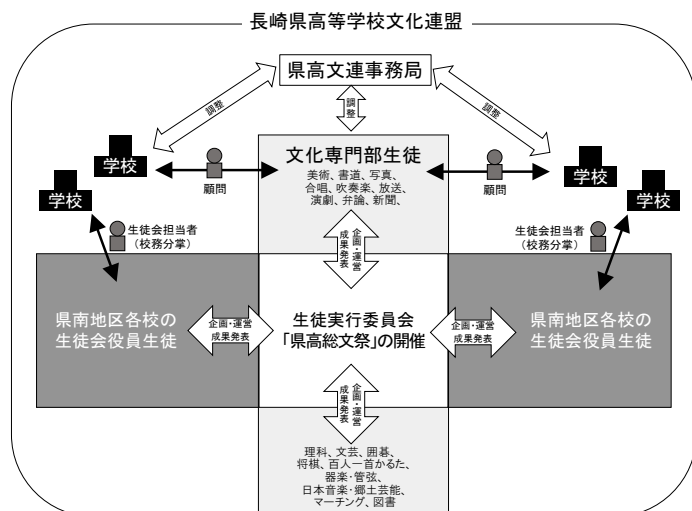


図2 「第1回県高総文祭」（県南地区）運営形態

## (2) 県内全高校生徒会の組織化と全国高総文祭の開催

上述のように、「県高総文祭」の実施へ向けた高校文化活動の充実が図られつつある折、2003年度長崎県高文連会報に以下の文面が記載され、2013年「全国高総文祭長崎大会」開催が検討され始める。

「昨年本県で全国高校総合文化祭を開催してはどうかという声が、各専門部から湧いてきました。(中略)全国大会が実現するとすれば、全国の組織の中で順番が定められており10年後ということですから、(中略)多くのクリアすべき課題があります。」(長崎県高文連 2003:1)

こうした動きを受け、県高文連としても全国高総文祭開催へ向けた体制整備に取り組まざるを得なくなった。そして私はこの動向を活用し、各校の文化祭や文化活動の更なる充実を模索し始める。そこで試みたのが「県内全高校生徒会の組織化」であった。

「第1回県高総文祭」を企画・運営するべく組織されたのは、**図2**で示したように、県南地区の各高校生徒会代表生徒を中核として組織された生徒実行委員会であった。しかし、第2回以降は県内3地区持ち回りで開催されるため、生徒実行委員会は1年限りの組織とならざるを得ない。

この状況について「第2回県高総文祭」(県北地区)後に変化が起こる。私は県高文連を活用し、「第2回県高総文祭」開催へ向け、第1回実行委員(OB・OG)と第2回実行委員を意図的に出せ、「県高総文祭」の経験を継承する機会を設けた。この仕掛けによって地域・学校・学年を超えた生徒同士のつながりが生まれ、このつながりを経験した第2回実行委員たちは、その後も引き続き各校生徒会とのつながりを維持したいと切望し、その組織化がなされる契機が生じたのである。

この「第2回県高総文祭」を契機として県内生徒会のつながりが構築され始め、2008年度には県内全高校生徒会生徒で組織する「生徒会交流専門部」が立ち上がることとなった。このように、各学校の生徒会を集め、県高文連の一組織として取り入れたのは全国で初の試みであった。そしてこの後の「県高総文祭」、そして「全国高総文祭長崎大会」へ向けた企画・運営は、「生徒会交流専門部」を中心として継続的に行われることとなったのである。

従来、先催県の「全国高総文祭」は、「生徒実行委員」を、その県の中心部の幾つかの学校を対象に公募で募る方式が一般的であった。しかし上述のように、長崎では「生徒会交流専門部」を核とすることで「加盟校<sup>(11)</sup>全てを総文祭に参加させる」(永田 2014:15)ことが可能となったのである。この「高校生の高校生による高校生のための文化祭」(長崎県高文連 2014:1)を目指した企画・運営方式による全国高総文祭は、「長崎方式」として全国的に注目されることとなった(**図3**)。

(福田鉄雄)

### 3. 各校への伝播

「県高総文祭」、「全国高総文祭長崎大会」の企画・運営方式として有名になった「長崎方式」には、既述のようにもう一つのねらいがあった。すなわちそれは、「県高総文祭」や「全国高総文祭長崎大会」に関わった生徒・教員が、かかる活動で得た感動やノウハウを自校へと持ち帰り、各学校の文化祭や文化活動をより豊かにすることにある。

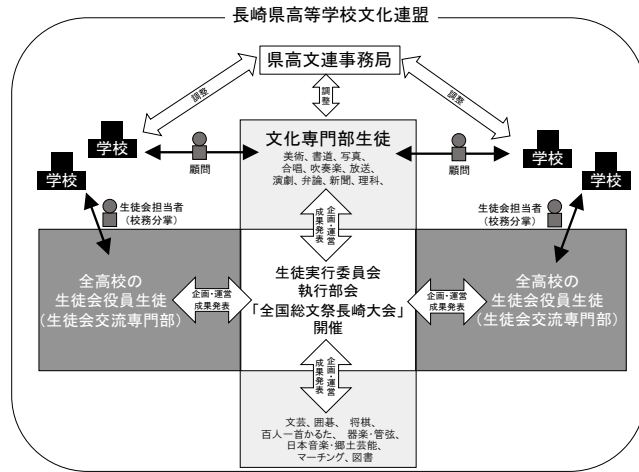


図3 「全国高総文祭長崎大会」運営形態「長崎方式」

『長崎方式』は加盟校全てを総文祭に参加させることに意味がありました。それは、多くの高校生が携わると同時に多くの先生方にも協力いただいたからです。生徒はもちろん、先生方が深く総文祭と向き合うことで、文化活動の本質を理解していただいたかったのです。というのも、今後新しい生徒たちに、先生方が本質を伝えていくことが、しおかせ総文祭(=「全国高総文祭長崎大会」：筆者注)の成果を生かしていくことにほかならないからです。」(永田 2014:15)

「全国高総文祭長崎大会」が実施された2013年度当時、前任校で生徒会担当であった私(前川)は、長崎という地方の生徒たちが全国で注目を浴びるような全国総文祭を創り上げていく様子を目の当たりにするなかで、それを何とか自分の学校の文化祭に繋げられないかと考えた。この「長崎方式」は必ずや各校の文化祭企画、文化祭運営の鍵になるだろうと確信していた。その成果が大きく反映されたのが、2016年度の西彼杵高校文化祭であった。

西彼杵高校は1学年2クラスの規模の普通科高校で、「少数ではあるが国公立大学に合格していく者たちから、種々の事情や障壁を抱えた特別に支援の必要な生徒」が在籍する、「いわゆる“周辺校”とよばれる学校」(福田・畑中 2017:181)である。それゆえ、「学力差が複雑多岐にわたり、また高校に学ぶ目的意識の希薄な生徒たちが多くを占め」、「授業はもちろんのこと生徒会活動や部活動なども沈滞しているのが現状」(同上書:182)であった。

この西彼杵高校では当時、「全国高総文祭長崎大会」を主導した福田氏が校長をつとめ文化祭改革に取り組んでおり<sup>(12)</sup>、福田氏はその先導役を私に一任したのである。この役割を引き受けた私は、各学級の演劇の充実を図るべく演劇研修会<sup>(13)</sup>等を実施して全生徒が文化祭へ関わる仕組みを整えるとともに、そのマネジメントにおいては「長崎方式」を参照し、生徒が主体的に文化祭を企画・実施する体

制を整備した(図4)。

生徒たち自らが企画をし、自らが創っていく。これこそが、まさに私が「全国高総文祭長崎大会」で学んだことであった。生徒が、スタッフ(裏方)としての技術的な専門性を高めつつ、企画や運営を体系的に行えるリーダーへと育てていく。前任校の五島高校でもそのような組織作りに挑戦したのだが、行事の企画・運営に誇りを持って取り組んだ生徒たちはとても輝いていた。西彼杵高校でもその運営形態をそのまま導入したのである。西彼杵高校は生徒の数が少ないため、その分一人ひとりに係る負担が大きくなるが、しかし、その中でおそらく、そうであるが故に)確実に生徒たちの主体性は育っていった。

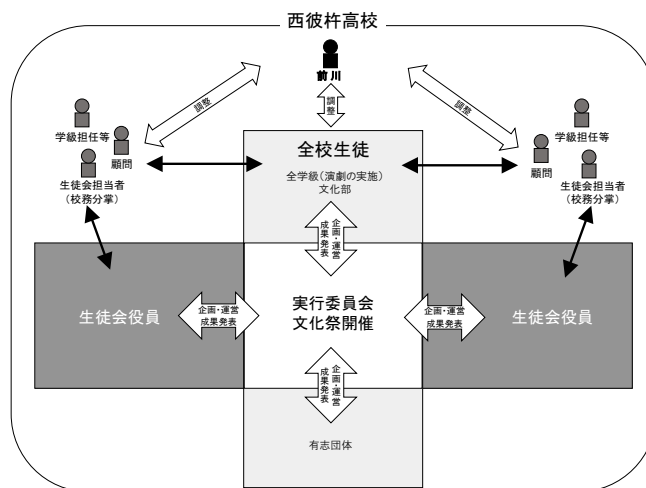


図4 西彼杵高校文化祭運営形態

このように生徒自らが文化祭を作り上げるシステムを構築することにより、西彼杵高校の文化祭は様変わりするとともに、西彼杵高校の生徒・教員にも変化が見られ始める。この様子は以下の生徒・教員の発言等からも窺い知れる。

このような生徒自らが文化祭を作り上げるシステムを構築することにより、西彼杵高校の文化祭は様変わりするとともに、西彼杵高校の生徒・教員にも変化が見られ始める。この様子は以下の生徒・教員の発言等からも窺い知れる。

H氏(高3生徒):少しずつ「自分たちでやる」というのが出来るようになってい人もあるなっていうのはあります。(中略)きっかけは先生たちが作ってくさっているんですけど、そういうのをやったことがない人とかが、「私もやってみたい」みたいな感じで出てきたりとかいうようにはなっていると思います。(14)

「当日に至るまでの様々な準備(企画運営、外部折衝、駐車場整理、環境整備など…)の中で、生徒も含めた「チーム西彼杵」の力が随所に発揮され、県内でも有数の力のある学校として、来校された地域の方々や教育関係者、各種メディアを通じて広く知れわたったのではないのでしょうか。この波、「西濤」に乗って、更に「生徒のための」「地域のための」学校を先生方や生徒たちと目指していきたいと思いを新たにしたところです。」(西彼杵高校教員通信 2016年11月17日)

その後の西彼杵高校では、生徒によってなされた「生徒憲章」の作成や、生徒発案による「卒業式の自主企画運営」、「生徒会企画委員会(演劇班・舞台芸術班・広報班)の発足」など、生徒の主体的な活動が目立つようになった。さらに日々の学びの様子も変わり始め(佐藤 2016)、難関校への進学を実現する生徒も現れ始めた。そして私は、上述した西彼杵高校での経験を踏まえ、2017年度からは県高文

連にて生徒会交流専門部を担当することとなった。「県高総文祭」と「全国高総文祭長崎大会」で培われた知識は、西彼杵高校で活用され、再度、県下全域へと広げられつつある。  
(前川卓郎・畑中大路)

### Ⅲ 考察

ここまで、長崎県における高校文化活動の展開、特に「長崎方式」の創造と継承について詳述したが、改めてその内容を概観したい。

長崎県の高校文化活動躍動のキーパーソンとなった福田氏は、「統合大会」の改革に取り組んでいた当時、県高文連を訪れた Y 氏を通じて、長野県における「生徒が主体的に企画・運営を行う高校文化活動」の実際を知る。そして、福田氏自身の信念と Y 氏から得た情報が融合し、「生徒主体の企画・運営」による「県高総文祭」実施形態を提案した。そしてその後、県高文連事務局を基盤としながら県内全高校生徒会のネットワークを形成するとともに、当該ネットワークを活かし生徒主体の「全国高総文祭長崎大会」を企画・運営するという「長崎方式」を作り上げた。さらに、そのネットワークに参画した前川氏は、「県高総文祭」や「全国高総文祭長崎大会」を通じて「生徒主体の企画・運営」という「長崎方式」の有効性を実感し、その知識を活用し、五島高校・西彼杵高校における文化祭改革・学校改革を牽引した。

この長崎県における高校文化活動の展開は、学校組織間における知識移転の実際を示すものといえ、ここから、その知識移転を可能とした二つの要点を抽出可能である。

一つ目は県高文連という「学校組織・地域間をつなぐ組織」の存在である。長崎県高校文化活動における知識移転の始まりとなったのは、(偶然ではあったが)県高文連を訪問した Y 氏と福田氏との出会いであった。高文連は全国組織化されたものであるため、各学校や他地域をつなぎ、その知識を集積する「場」となりうる。それゆえ、福田氏は県高文連を通じて Y 氏や他県の高校文化活動の実際を知り、また、福田氏が獲得し創造した知識、例えば「県高総文祭」や「全国高総文祭長崎大会」運営形態である「長崎方式」をはじめとするアイデアやノウハウは県高文連に蓄積され、そこへとアクセス可能な教員・生徒へと移転していった。

二つ目は、「教員の人事異動」である。そもそも、福田氏が長崎県高校文化活動発展のキーパーソンとなるに至ったのは、人事異動により県高文連事務局のある長崎北高校へ異動したことに起因する。またその後も、県高文連へ関わりをもった教員、例えば前川氏は、「県高総文祭」や「全国高総文祭長崎大会」を通じて高校文化活動発展に関する知識を獲得し、その知識を自校へと持ち帰り、また、人事異動によって当該知識を他校へと移転させていった。知識移転理論が生成された企業組織では、人事異動は出向を除きそのほとんどが同一企業内他セクションへの異動を意味する。それに対し学校組織における人事異動では、他組織である



他校への異動が毎年度行われており、その人事異動を通じて知識移転が生じる可能性が読み取れる。

以上より、長崎県における高校文化活動の展開は、県高文連の充実と、それを支えた教員人事によってなされたことがわかる。

## V おわりに

本稿では、長崎県における高校文化化等の展開過程を詳述するとともに、その実際を知識移転の視座から分析し、発展を支えた二つの要点として「学校組織・地域間をつなぐ組織(県高文連)の充実」と、それを支えた「教員の人事異動」の存在を示した。もちろん、上述した考察は長崎県に限ってのものであることは留意すべきである。また特に、「教員の人事異動」に関しては高校文化活動の充実だけを目途に実施できるわけではなく、教育活動全体を視野に入れたうえで行われるべきものである。しかしだからこそ、高校文化活動の展開における「学校組織・地域間をつなぐ組織(県高文連)の充実」の重要性はより強調されてもいい。

今後は高文連の充実を図る方策を探るとともに、長崎県の高校文化活動の展開過程を引き続き長期的に追うことにより、より具体性・汎用性のある高校文化活動発展の要因を明らかにすることが課題である。(畑中大路)

### 【注】

- (1) 全国高文連ホームページより引用。 <http://www.kobunren.or.jp/about/index.html>  
(最終確認：2018年1月23日)
- (2) 高等学校文化連盟は各種会報等を発行しているが、関係者以外がそれらを手に入れることは難しい。
- (3) 詳しくは畑中(2015a)を参照されたい。
- (4) 長崎県には2017年度現在、以下の22専門部が組織されている。①美術専門部、②書道専門部、③写真専門部、④合唱専門部、⑤吹奏楽専門部、⑥放送専門部、⑦演劇専門部、⑧弁論専門部、⑨新聞専門部、⑩自然科学専門部、⑪文芸専門部、⑫囲碁専門部、⑬将棋専門部、⑭百人一首かるた専門部、⑮日本音楽専門部、⑯郷土芸能専門部、⑰吟詠剣詩舞専門部、⑱器楽・管弦楽専門部、⑲マーチング・バトントワリング専門部、⑳図書専門部、㉑生徒会交流専門部、㉒JRC ボランティア部門
- (5) 県高文連では、県域を「県北地区・県央地区・県南地区」として括っている。
- (6) 具体的には、美術専門部、書道専門部、写真専門部、合唱専門部、吹奏楽専門部、放送専門部、演劇専門部、弁論専門部、新聞専門部の九つ。
- (7) 県高文連事務局員は当時、理事長と事務局長、会計担当も含め6~7名であった。しかしその全員が、各教科および事務の担当者として学校に通常で配置されている教職員であり、それぞれが授業、補習、クラス担任、校務分掌、部活動、事務

等を担当していた。そのため、県高文連事務局の仕事は、通常の校務外のボランティア的な活動を余儀なくされていた。

(8)私(福田)とY氏は、大学時(東京学芸大学)の旧友であった。

(9)当該プロジェクトの詳細は右記ホームページに詳しい。<http://210.150.5.32/>  
(最終確認：2018年1月23日)

(10)2015年5月24日10:00～12:30に実施したY氏インタビューより引用。

(11)長崎県では県内すべての高校(特別支援学校高等部を含む)が県高文連に加盟している。

(12)例えば福田氏は、2014年度文化祭において、全学級での演劇実施を導入した。

(13)この研修会は1泊2日で行われ、各学級の演出と主演を担う生徒2名の参加を義務付けている。これにより、研修会の内容が演出・主演の生徒を通じて各学級へと還元される。なお、当該研修会の講師には、私(前川)が「全国高総文祭長崎大会」で知り合った長崎県内私立高校の演劇部顧問を招聘している。

(14)2017年2月21日12:20～13:10に実施したH氏インタビューより引用。なおH氏は前生徒会長であった。

#### 【参考文献】

- ・天野紘(2003)「草創期から充実期へ～長崎県高等学校文化連盟の10年～」『長崎県立長崎北高等学校 創立四十周年記念誌』。
- ・佐藤学(2016)「隠れキリシタンの半島に生まれた高校改革の拠点校」『総合教育技術』71巻7号、pp.98-101。
- ・永田英樹(2014)「総文祭は最高の「学び」の場」『全国高文連会報』第28号、p.15。
- ・中西善信(2013)「知識移転の構成概念とプロセス—知識の使用とルーチン形成の相互作用—」『日本経営学会誌』第31号、pp.27-38。
- ・畑中大路(2015a)「学校組織間における知識移転—カリキュラムマネジメントの事例を踏まえた仮説生成—」『教育経営学研究紀要』第17号、pp.13-22。
- ・畑中大路(2015b)「学校組織におけるナレッジマネジメント—高等学校生徒指導のケーススタディー—」『東京理科大学紀要 教養篇』第47号、pp.189-206。
- ・福田鉄雄・畑中大路(2017)「学校経営におけるビジョン形成・具現化プロセスの考察—西彼杵高校の学校改善に着目して—」『教育実践総合センター紀要』第16号、pp.180-189。
- ・長崎県高文連『高文連会報』第1号～28号、1990～2017年。
- ・OECD教育研究革新センター編著、立田慶裕監訳(2012)『知識の創造・普及・活用—学習社会のナレッジ・マネジメント』明石書店。

【追記】本研究はJSPS科研費15K17370の助成を受け実施された研究の一部です。